

二日間降り続いた雨があがった秋の昼下がり、私は4歳になるいとこの男の子と二人でおばあちゃんちの隣にある公園に遊びに来ていた。家の中で走り回ってはしゃぐものだからほこりがたって困るので、せめてもと外へ連れ出したのだ。雨上がりの公園の地面はぐしょぐしょ、滑り台はびしょびしょで遊べたものではなかったが、彼は嬉しそうにいつもとは違う足裏の感触を楽しんでいるようで、水たまりをよけながらぴょんぴょんとはずんでいた。ピカピカの長靴がどんどん汚れていくのを見て、おばさんに申し訳ないと思った。そのうちに彼が地面に手を伸ばし、落ちていたごみを触り始めたので私は焦った。

「だめ！さわっちゃ！汚いから！」

「…いけんよね。こうえんにごみすてたら。おかたずけしよっか！」

はっとした。彼は小さな手で自ら、雨上がりのぐしょぐしょになったスナック菓子の袋やペットボトルを拾い上げ、ひとつひとつ公園の隅にあるごみ箱へ、何度も何度も、一生懸命に背伸びして、手を伸ばして、彼の目線よりも高いごみ箱の口にシュートしている。にこにこしてまるで遊んでいるかのように楽しそうだった。私もその笑顔に促されるように無意識に手伝いはじめていた。

きれいになった公園をぐるりと満足そうに見回すと、彼は言った。

「これできれいになったけん、またみんなおともだちがあそべるけんね！」

後で聞いてみたら、おじいちゃんと二人で公園に行ったときはいつも、このようにごみ拾いをしているらしい。それを今日は一人だけでもやろうと思ったのだ。私はその小さな背中にとっても大切なことを教えてもらい、自分のことを小さいなと思った。少し恥ずかしくもなった。また今度彼と一緒に公園に行ったときは、次こそは私から言おうと思う。

「おかたずけしよっか！」